

食事中の水分摂取についてのアンケート調査

○毛利元治

もうり小児歯科（福岡市）

「かまない、かめない」など、小児の摂食機能が問題視されてかなりの期間が経過した。演者の医院でも同様の問題を持つ子は少なくなく、保護者自身が日常生活の中で摂食機能の発達を育てる方法を模索している。

一方、食事の中のお茶や水、牛乳などの水分摂取のアンケート調査は、本学会および東京都幼児基礎身体・栄養調査、日本学校保健会でも行われ、いずれも60%以上の子どもが食事中に水分を摂取している。

今回は丸のみの原因とも考えられる食事での水分摂取について、保護者の意識と子どもの現状をアンケートした。

対象は、当院で平成14年5月～9月の定診登録および同年6月～7月に来院した患者の保護者で、15才以下の子がいる332軒の家庭である。また、回答は無記名、郵送にて回収し、68.4%の回答を得た。

1) 子どもの食べ方が気になるかとの問いに、特にない(24%)、一口量が多い(36%)、かまない(24%)、口を開けて食べる(14%)、丸のみ(12%)、口のまわりが汚れる(10%)の回答だった。

2) 保護者(記入者)の37%が食事中に水分摂取し、49%は食後だけの摂取だった。また、子どもの食べ方に問題がないとの回答は、水分摂取する保護者が28%、摂取しない保護者が20%と差が見られた。

3) 子どもの73%が食事中に水分摂取し、21%が食後だけ摂取していた。また、親と同じ摂取傾向を持っていた。

4) 食事での水分摂取について68%の保護者に説明を終えていた。その結果、69%は食後がよいと答え、16%だけが問題ないと答えた。また、食事中に水分摂取する保護者ほど、問題ないと答えた率が高かった。

心身障害児(者)における健康教育を考える

— 全身麻酔下における集中的歯科治療を受けた患者と介護者を通して —

○尾山里奈、上野文代、田中千穂子、

*森主宣延

鹿大・歯病・発達系看護部、*鹿大・歯・小児歯

【緒言】口腔保健に対する意識の向上と口腔衛生状態の改善を目的とし、全身麻酔下集中的歯科治療を受けた患者とその介護者に対して、入院期間中に健康教育プログラムを実施した。その後の定期健診時で評価を行い、入院期間中の介護者に対する口腔保健の動機づけの有用性と健康教育に対する今後の方向性を見出せたので報告する。

【対象と方法】対象は小児歯科の全身麻酔下集中的歯科治療を受けた患者の介護者28名である。方法は、入院期間中の健康教育の実施と介護者への質問紙調査を行った。

【結果および考察】1. 歯磨きについては、歯磨きに対する責任感と歯みがき行動に関連が認められた。前項にあげた歯垢付着・歯肉炎状態の結果にも反映されており、この理由としては、視覚変化がわかりやすい歯肉炎の改善が介護者の口腔衛生に対するやる気を向上させたためと考えられた。2. 間食については、意識と行動の変化に関連が認められた。このことは口腔衛生に対する間食の重要性を介護者が認識することで意識が変わり、それに伴い行動も変容したものと考えられた。3. 患児の歯磨きに対する受け入れについては、半数が「変わった」と回答した。これは、術後に痛みがとれ、歯磨き時の疼痛がなくなったことと、介護者の行動に変化がみられたことなどが理由としてあげられた。さらに、患者の受け入れと口腔衛生指導による口腔状態の改善との関連性も示唆された。以上のことから、歯磨きは、単なるう蝕予防のみならず口腔の過敏除去、身の自立訓練、生活リズムの形成などに役立ち、さらに歯磨き動作は服の着替えなどとの相乗効果で左右、前後などの空間認知を向上させる有用な手段であるといわれているので、今後は個々の発達段階とブラッシング・レベルを十分に考慮した上で学習プログラムを作成し、呈示していく必要があると考えられた。